

塚本千秋〔著〕

思春期青年期の臨床・学校

A5判並製・金剛出版

2025年5月刊

定価3,740円（税込）

評者＝中村有吾（同志社大学カウンセリングセンター）



年齢を重ねると、良くも悪くも経験が増え、知識も頭の片隅に蓄積されていく。一方で、目の前の学生の困りごとやその背景にある微細な心の動きや文脈を感じ取れているのだろうか、感受性のフィルターが粗くなっていないのだろうか、漠然とした不安を抱くことも少なくない。

本書を読み進めるなかで、まさに核心を突く一文に出会った。『『専門家』として向上すればするほど、『非専門家』ではなくなっていくということである。それはひょっとすると、繊細な感受性を持って人の痛みに寄り添おうとする人間としての“劣化”かもしれない』（p.19）。

『思春期青年期の臨床・学校』という本書のタイトルは、対象が限定されていると感じさせるかもしれない。しかし、実際にはすべての臨床家が自らの在り方を問い直し、新たな示唆を得られる内容となっている。精神科医、大学教員、指導医といった多様な立場から書かれた論文や講演原稿により構成されており、「よい臨床家の条件」「治療関係」「患者への提案」「他機関との連携」など、臨床に関する幅広いテーマが論じられている。著者の眼差しは、眼前の患者だけでなく、同僚、ステークホルダー、さらには病院や会議の場といったより広い文脈にも向けられている。それにもかかわらず、本書には不思議な統一感が漂っている。

その根底にあるのは、「ご自身のビートに合う原稿をみつけて」（p.3）という言葉に表れているように、一貫した著者の「プロセス知」に開かれた姿勢と深い洞察である。ここで言う「プロセス知」とは、記号的な知識（情報知）とは対照的な、臨床現場における反復的な行為や身体的な経験を通じて獲得される、言語化されにくい知である。それは著者の情報知という強固な基盤があってこそ成立している。しかし同時に、「素人である患者さんや、素人に近い新人と疎通がとれないで、いくら技法が発展しても本末転倒です」（p.40）

と述べるように、著者は決して高みから語るのではなく、平易で親しみやすい言葉で語りかける。そのため、専門的な内容を深く掘り下げながらも、親しみやすさと奥深さの両方が残る。著者の語り口や姿勢に触れることで、読者は臨床家としての視野や姿勢を改めて見直したくなるだろう。また、臨床を取り巻く包括的な視点が紡ぎ出す意義は、複眼的な思考と多様な立場の重要性に気づかせてくれる。

さらに本書の魅力を高めているのが、各部・章の冒頭に執筆当時の心境や関心事が率直に綴られている点である。それぞれの執筆の文脈が伝わることで、読者は自身の経験を重ね合わせながら読み進めることができる。

一度読んだだけで完結するものではなく、臨床家として経験を重ねるたびに、異なる感想や新たな視点が得られる一冊となっている。